

意見陳述

原告 加藤 浩道

私は原告の加藤浩道です。

1945年7月22日、後志管内喜茂別町で生を受けました。物心ついてからは、毎年自分の誕生日のすぐ後に原爆投下や敗戦があり、歴史的出来事とともに年を重ねていくことに気がつきました。のんびりとした田舎暮らしながら、いつも物不足でノートや鉛筆を買うにも事欠き、早く困らない生活が送れる社会にならないかと思っていました。エネルギーについても鉄腕アトムを見て、いずれタバコくらいの大きさのバッテリーで車が動き、スツーカーくらいで列車や飛行機も動かせる世の中になると思っていました。

しかし実際には、原発は爆発を制御しながら発生させた熱で水を沸かし、タービンを回して電気を発生させるというただの巨大な湯沸し器だと知り、本当に驚きました。それでも原発の危険性を感じながら安全で安価、資源小国日本で電力を確保するには絶対必要なのだとの宣伝につられ、まさか自分が生き

ている間に事故は起こらないだろう。何より物にあふれた今の快適・便利な生活は手放せないと深く考えず見過ごしていました。



ところがその原発がフクシマで2011年3月11日に壊れ最悪の大爆発まで起こしました。その様子を見て、東北はおろか日本が全滅ではないかとさえ思いましたが、一方では力の抜けた気持ちになったのも事実です。それは何故かと言いますと、あの光景と現場の決死の作業、20万人近くの避難民など、事故の過酷さを実感したなら全ての原発が廃炉への動きとなり、これからは原発事故の不安から全国民が解放されると思ったからです。また、再生可能エネルギーへの開発も急速に進んでおり、様々な考えがあったとしても国民はもうろん電力会社も政府も再稼働への動き

にはならないと確信していました。

しかし泊原発は再稼働へと動き出しました。高橋はるみ前北海道知事は「道民を凍死させたくはない」との言い回しをし、また田中俊一前原子力規制委員会委員長は「近代社会では国民は電気をじゃぶじゃぶ使う便利な生活を止められるはずがない」とまで言い、原発の必要性を説いていました。さらに北電ビルの正面には「節電にご協力をお願いします」と事故後からずっと今も看板を掲げています。節電の協力なければ再稼働は当然だと言わんばかりです。

北海道の産業をエネルギー面から支え発展させてきた北電が、道民の心配や不安をよそに、ただただ利益のみを追求するとても残念な企業になったように思います。経産省でさえ北海道の電力供給は原発が稼働していなくても十分余裕があると言っています。(2016年)

今や原発は経済的にもお荷物になっているのに止めないのは、止めるべきだと判っていないが止めることができず、止めた時の禁断症状への緩和策も持たない中毒患者を思わ

せます。

であれば、私は道民の一人として、少しでも泊原発は廃炉との決断を促すために何ができるか、何をすべきかを考えた時、3つの課題を立てました。1つ目は原発での発電量を3割と考え、3割の節電をすることです。2つ目は原発で使った便利で快適な生活を見直し、可能な家電から捨て始め、炊飯器、テレビ、冷蔵庫も手放したら、電気代も月に5,000円から現在では8割以上の節電で月900円程度ですんでいます。3つ目は電気の自動引き落としを止め、毎月北電窓口で支払う際に再稼働反対を訴えることです。3つ目は年賀、暑中見舞いに春と秋を加え、年4回脱原発への思いをハガキに込めて出すことです。7月に知人・友人約300人に出した暑中見舞いのハガキの一部を紹介させて頂きます。



加藤さんが自分でデザイン、作成したティッシュ。街頭でみなさんに手渡ししています。

「霊長」が核の火持ちて愚かなり
破滅への道 止めねばならぬ

人類は二足歩行や言葉の発達とともに火の使用と道具の製作で文明の道へと歩み、自らを「万物の霊長」とまで称しています。その人類が核の火を発見し原爆を作り、最初の実験場としてヒロシマ・ナガサキに落としました。原爆の凄惨さを知っているはずの国民が原子力の「平和利用」との喧伝に乗せられ、原発の買い込みと全国に設置をさせてしまいました。しかしその「文明」の象徴的産物でもある原発は、フクシマの事故で史上最大の公害として文明の破壊・人類の破滅にも直結すると多くの人は気づきました。あくなき利潤の追求と野望による惨事だったと言えます。

先日、北電社長の泊原発の運転期間20年延長発言などは重大な問題を抱えたままで、とても正気の沙汰とは思えません。より多くの人の泊原発廃炉の意思表示が必要と痛感しました。

以上、泊原発は廃炉との判断を願ひ、私の意見陳述を終わります。